

**札幌医科大学アイン・ニトリ緩和医療学推進講座**  
**「がん相談サロン」平成 27 年度 事業報告書**

1 運営目的

「がん相談サロン」は、がん患者やその家族が、互いに自由に語り合い、必要な知識を得られる場所を提供することで、療養や生活における不安や悩み、孤独感を軽減するとともに、療養生活の質の向上を目指すことを主な目的としている。

2 平成 27 年度の主な事業内容について

(1) 参加者体験型・交流イベントの実施【広義の交流会という位置づけ】

- ・ ウィッグ・ケア帽子とカバーメイク講座（H26 年 5 月から実施、毎月 1 回）
- ・ がん患者さんのためのヨガ教室と茶話会（H26 年 6 月から実施、毎月 1 回）
- ・ 「自由に語り合える場」の提供を目的に、緩和医療学推進講座の部屋を開放（毎月 1～2 回ほど）

(2) 学習会の実施

がんに関する正しい知識や情報などを提供するため、院内外に講師を依頼し、月に 1～2 回実施。

(3) 個別相談

がん患者やその家族が抱えている療養や生活に関する不安、社会資源の活用等について、スタッフが個別相談に応じている。これまで延べ 2 5 8 件の相談があった。（H27 年 3 月末現在）

(4) 市民公開講座の開催

一般市民を対象に広く「がん」や「緩和医療」についての情報・知識を提供することを目的に、市民公開講座を開催した。開催結果は、（別紙 1）にて報告する。

(5) その他の活動

がん患者・家族・医療従事者の相互支援団体「岩手ホスピスの会」と連絡を取り、手作りの「タオル帽子」を 50 枚送付していただいた。その後、院内へ周知し、配布希望者へ一人 1 枚ずつお渡し。受取から約 1 か月で全て配布が終了し、ニーズの高さを実感した。

その後、院内の各部署や個々の職員から協力を得て、「岩手ホスピスの会」へ、帽子の材料となるタオル約 350 枚を寄附。

区分	延開催回数	延参加者数	参加者の状況					
			患者	家族	その他	当院	他院	その他
ウィッグ・メイク講座	12回	44名	43名	1名	0名	44名	0名	0名
ヨガ教室	12回	72名	66名	5名	1名	67名	4名	1名
女性のがん交流会	5回	22名	20名	2名	0名	19名	3名	0名
サロン解放日	14回	27名	27名	0名	0名	27名	0名	0名
街を歩こう会	4回	11名	7名	0名	4名	8名	0名	3名
学習会	11回	156名	78名	26名	52名	89名	19名	48名

延相談件数	相談者の状況					
	患者	家族	その他	当院	他院	その他
258	198	36	24	224	24	10

(別紙1)

## アイン・ニトリ緩和医療学推進講座

### 平成27年度 市民公開講座「がんと共に、わたしらしく生きる」 実施報告

- 1 日 時 平成28年2月24日(水) 13:00~16:00  
<ブース展示> 13:00~16:00 <講演> 14:00~15:30
- 2 場 所 札幌医科大学 臨床教育研究棟 1階 大講堂及び講堂前ホール

#### 3 プログラム

##### 【ブース展示】

がん療養を支援する患者団体・企業など(全9団体)がPR活動や福祉用品の紹介を行った。出展にご協力いただいた方については、(別紙2)を参照。

【講 演】 司会：岩崎 創史(アイン・ニトリ緩和医療学推進講座 兼任講師)

座長：山蔭 道明(アイン・ニトリ緩和医療学推進講座 兼任教授)

講演①「がん患者からのメッセージ」

がんサバイバー(札幌医大患者) 藤山 とめ子 氏

講演②「自分らしく生きるために ~緩和ケア~」

札幌清田病院 緩和ケア科・麻酔科 部長 渡邊 昭彦 先生

4 来場者数 169名

#### 5 実施内容

##### 【ブース展示】

展示コーナーでは、肺がん・乳がんなどの患者支援団体による活動PRをはじめ、医療用ウィッグや帽子、乳房切除後のケア用品など多くの福祉用品の紹介を行うブースも設けられ、多くの方が見学されて終始活気に溢れていた。出展者同士の交流も深まった様子もあり、ネットワークの広がりにも繋がった出展となった。

##### 【講 演】

藤山氏の講演では、これまでの経緯(がんと診断され、手術4回、化学療法27回を受けたこと等)から現在に至るまでの気持ち、がんになって初めて気づく家族や周囲の支えの大切さについて、ご自身の言葉でしっかりと語られていた。

渡邊医師からは、①症状緩和(主に痛み)と②コミュニケーションに焦点を当てた話があった。

現在の日本は2人に1人ががんに罹患し、3人に1人ががんで亡くなる時代であり、高齢化も進む中で今後さらにがん患者が増えること、がん対策基本法やがん対策推進基本計画等の動き、緩和ケアはいわゆる終末期の治療ではなく、がん診断時からがん治療と共にあるものであり、がん医療の両輪として進んでいくものであることがわかりやすく説明された。

講演終了後、2名の演者に登壇してもらいフロアを交えてパネルディスカッションを行った。